

この町に生まれ

日いづる国の波打ち際で
桜が咲く日を待ちのぞむ

波の飛沫が日をつつみ込めば

私はひとりで町の境に

立ち尽くしたまま

閉じた目に赤い十字の絆をつくる

赤い十字の絆の下で

波打つ港は敦賀かと思ひ

桜の咲く国へと導かれたのなら

命のビザを今、手に入れんと知る

境界線にはフォルケフオイスコーレ

かつてせたなの盟友たちと

杯を交わしシベリアの地の極寒を想ひ

函館の山のハリストスを聴く

小篠 真琴

三本杉まで打ち寄せる波は

アレウト号からの号砲なのでは？

慰霊の聲だけ鳴り響くだろう

円空仏から切り取る能面

目を閉じもう一度、赤い十字を

ウクライナまでは届かぬだろうか

日いづる国の旗はゆれると

下からだ半分のみ熱波に染める

攻め入ることはなきにしもあらん

今金の地の境に立ち尽くし

私の魂を授けるべきは

未来永劫、祈りつづける

波に浮かべた桜の舟だ

(こしの・まこと、詩人、瀬棚郡今金町在住)

※詩友から、隣町せたなでフォルケフオイスコーレに取り組

む知人の地縁を教わり、その境界から詩想を得る。

